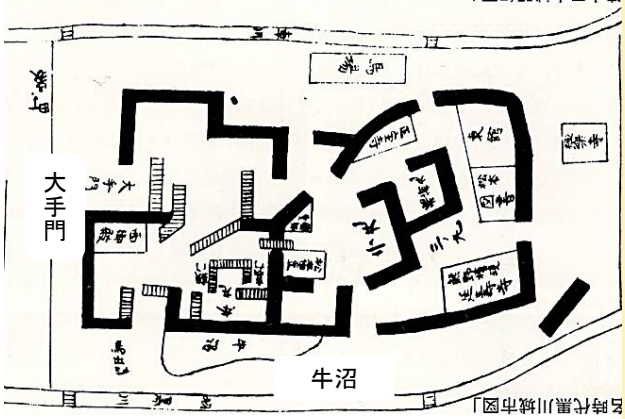


葦名時代の「会津小田山城明細図」

城の名称

黒川城、鶴ヶ城、若松城、若松城跡、会津若松城

黒川城は葦名時代から伊達政宗までの名称。鶴ヶ城は通称名。若松城は全国的な名称。若松城跡は国史跡の名称。会津若松城とは江戸時代の名称です。

所在地　会津若松市追手町一―一

会津若松市所有。

昭和九年十二月二十八日国指定史跡

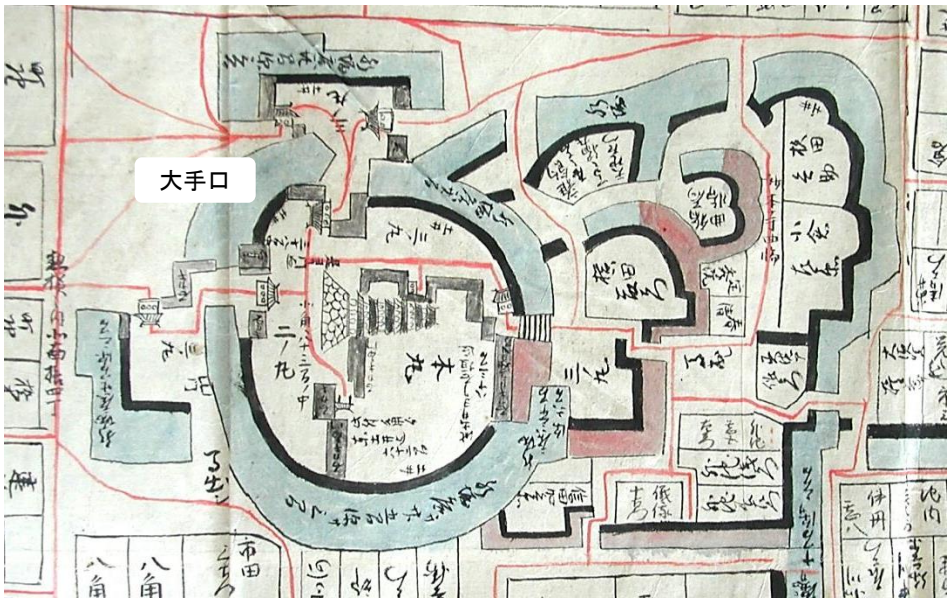
蒲生氏郷は天正十九年（一五九〇）八月に会津に入り、文禄二年（一五九三）総黒色の七層天守閣を建てます。軒先瓦に金箔を貼りました。

慶長十六年（一六一一）蒲生秀行の時、慶長会津大地震で天守閣が傾き、元和六年（一六二〇）までには、蒲生忠郷が白色七層に大修理します。しかし、傾きは収まらず、寛永十八年（一六四一）加藤明成が天守閣を白色五層に立替し、幕末の姿となります。

昭和四十年九月十七日、天守閣は鉄筋コンクリートで復元されます。

蒲生氏郷の大改修

左の「若松城図」は、元和六年（一六二〇）に描かれたものです。この図には、石垣が灰色、堀が水、空堀が赤、道は朱色と精巧に描かれています。天守閣は白色六層（本来は七層）となっています。三ノ丸が四カ所あり、元和七年（一六二一）に取り壊される稲荷曲輪があります。



蒲生氏郷は、『新編会津風土記』に「天正十八年蒲生氏郷封ニ就テ再ヒ改築ノコトアリ、初氏郷芸廣州島ノ城ヲ模シ築シト志シ、見エ奉リ」とあり、徳川家康に城の改築を相談しています。

このことについては、『徳川実記』付録六、「落穂集」に

「蒲生氏郷も會津の就封を謝せんため。同じく上京して御參會の折から。會津城經營の様を尋給ふ。氏郷いはく。會津の城は、芦名家以來芝土居にて有しを。こたび石垣に築直しぬ。そもそも殿下今不肖の某をもて、大國の重鎮となし。そくばくの地下し給ひし上は。せめて居城にても見苦からぬ程になし置んとて。國々の城地のさまを參見せしに。毛利輝元が安藝の廣島の規摸某が胸にかなへば。會津も是にならひて作出んと存ずる旨申上しに。すべて城の大小とその主の身分の大小にかなふがよし。本丸はじめ二三の曲輪は塀櫓迄。心を用ひて作出んはいふまでもなし。その外の曲輪一二の門舛形も同じく心を用ふべし。外郭の塀などは、時にのぞみてもたやすくかくる事なるべし。無事のときは、土居石垣ばかりにて置たるがよし。廣島のごとく外郭の塀までかくるには及ぶまし。」

とあり、同様の事柄が書かれています。

左上にある葦名・伊達時代の「黒川城」と比較すると、現在ある二ノ丸や三の丸の部分にあった曲輪の位置や形に大きな変化がないことから、それまであった黒川城の曲輪を生かして大規模に改修したことから、早く城が完成したようです。「若松城図」を見ると天守閣や門などは石垣としていますが、西出丸や北出丸は、土塁であり、現在より小さく、葦名時代と変わらない規模だったようです。

また、王手口は、甲賀町通りから天守を正面に見て、北出丸の西側から入ったようです。搦手は、現在の若松商業高等学校北側の通りで、西から天守を正面に見て西出丸に入りました。

図・写真・文　©石田明夫2017　問合せ　Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索。